青山御流

活花手引種前篇 五

○艸木剪时手当用方の事

○艸の類夏より秋迄ハ別而朝に。花葉の露有内剪採進る又夕方ならハ葉に及露常ある頃よし。日光昇り露乾て後剪取しハ花葉痛て久く保次。木の類迚も同断也。尤無用の枝葉ハ兼而鋏に除去て。逆に根本より清水を灌かけ。席に移さハ風なく水気有土地。又板間ならハ。水鉢并納戸類抔に根本を撰へ涼く活置べし。一旦水揚兼る共晝の間ハ水気有冷る所へ。花を撰へ据置あて。樹々悪もよし。但秋葉青葉抔に於ハ露を灌ぎ花葉乾ざる様。又むれざる様に薄く覆ひ置もよし。殊に六七月の艸花ハ。晝中。亦風有節抔ハ自ら花葉乾て。水揚兼る故

床に飾らバ當を上に如くして。禄うし置べし。もし暑氣
火氣(くわき)燻(けぶり)杯の。甚しくむれさる所へ囲(かこい)置べし　右二枝三枝の花ハ留手桶筒杯に活れを
野へ花计下へおりて萬様と共ニ活也ニ物帰りて水多き瓶へ移して弥数日保なり
○杜若。花菖蒲。あやめ。いちはつ。檜扇杯ハ。花溜ハ。其ニ
同じ。始終真直(まつすぐ)に立(たて)て活置べし。剣(けん)ハ横(よこ)く直時ハ。花首
曲り易く。花も背(そむけ)て咲也。よく揃へ並(ならべ)て細き竹撞(むくげ)の枝
杯に。直なるに。引きの紙に。打葉(ちやう)由て。ゆるく結つけ。水
深く活置べし。もし曲りて面白き節もあれバ。大概(たいがい)ハ悪(あし)
く癖付(くせづく)迄葉も一旦。水揚てバ禄うして形く新へ
○仙翁。梅子。がんぴ。紅類。或杜若。花菖蒲。百合。杯の用ぎら
去家花にハ水を灌(そゝ)ぎ。急(いそ)ぐべし。若露を帯びハ速(すみやか)に振り

拂ふべし。杜若類。花に露あれバ。雨押(うちあつふ)ため易く(やすく)。せん
ならの類ハ。色(いろ)損じ。百合ハ。蘂(しべ)類。花粉(くわふん)に。こぼれ。水仙ハ。花
重く。形備(うつむ)くとなり。唯葉類ハ。水を打べし。是等の花は
活ぼらハ。格別用ハ。露なくして後。萬様るべし　水を嫌ふ花の類なり
おもむくしやせ様なし。是ハ花ふまさに所の入用なく
○冬より初春の花。梅椿水仙ハ勿論。其外木艸なれ。日
々陽気遠く。暖(あたゝか)なる所へ囲べし。氷凍(つく)る
に随ひ。花葉枝茎も凍て。水氣通(つう)せざる故。痛(いた)み萎(やせ)る
し。然れ。枝葉も割(こそ)くなりて。捨まハ折ものなし。室(むろ)咲物
と。水仙杯ハ別して悪し
○いづれ木瓜(ぼけ)。石榴花(ざくろくわ)。杯ハなげ針をよし直捨べし。又

百合の開花ハ蘂をえさみ捨て活べし。仙翁ハ捕苔。花
の害ハ虫なり。桃の枝ハ漆毛虫の巣有り。何連も能
取去遣有風荒よ楽し。毛虫なる子葉長ある者之。諸花能く
後ち活。床ハ損べし
○夏の菊ハ採と其侭根を焦或熱湯に入。後筆水をして
床ハ損ろ事ぞ。夜分朝夕ハ水深く活る。宜の間ハ古地。枝の
間根に。初めの如く常して。移せるべし。水打事も能り繁
られバ。葉むれ腐易。但秋迄も風強き苔ハ。損うし宜し
花床に損せしも。如此すれバ保久し
○秋の菊ハ。採て直ぐ活るべし。能水を揚る之。されば
二岐三岐の。長き枝なり。繁き所ハ夏秋ハ艸末にに

水揚がらけれバ。其所を能打ひしぐか又ハ折採。かきめ
を去。一本立ハ悪ば能水を揚る之。但葉ハ水にひたさざるがよし
○夏宜中採に。遠方より取寄る事あらバ。艸木
ともに。笹艸枕なる青葉採に。水を打かけ。夫より花葉を纏
其上を。莚或ハ楯の類にて。包み白地に。日にあてざる様
に逆し白に。献ひとつ置し。其日向を持来て。花の様子
をみるべし。悪ハ水を灌べけれバ。暫冷る所に熱気をさる
後。十分に。逆水せし。又ハ其の首際をひさし暫過後引上げ活
立べし。横さへ立なば。其の活姜類損ハ除て勘弁あるべし
○艸花ハ採取内にも。気なる熱ありて。水かなき。葉ひるし
ゆへに挿入れる間も。打く露を打べし。挿上手を引て後

瓶内の水と。同気相求て。能活生するなり

○冬ハ花茎團。他堺へ送るにハ。笹或菰莚等稍杯に

巻重も包みて。よく風の通らざる様にして送るべし

水仙ハ勿論。其外ハ。蓮。萱。葉蘭杯は玉の如き物ハ。蒼朮京

多きは能水あげさせて後。笹或大竹を。割合せて。其内に詰

目張して。其上を菰莚杯にて包み。送ハ十日も廿日も。

萎まず。損る事なし。又梅桃の類杯も。二日計もよろし。

活出て後大根を長さ三四寸程に輪切にし一握ほどを

水に漬け。夫に刺て。箱に詰縛れば。五七日は是迄ハ損せず

送り物も。又ハ二日の所へハ。奉書紙を湿めし。根を包みよし。何も

落さぬ用意を撰ひ送るべし。尚時宜に随ひ斟酌あるべし

○草花活にても水揚さる物を。根を焦し又ハ熱湯にて煮つ

け或冷水へ移し。亦茎割き物萩杯ハ湯にて浸置もよし

○深山にても苗多繁き草ハ水あげ難し。夫ゆへ水中にて

本の茎を竪に。二所も三所も小刀目を入置べし。又心を

止み通ふすもよし。或折ひしぎてもよし。惣て草木ともに。枝葉

繁茂なる時ハ。是ハ水氣乏しく難し。故に三分一或抽により

中端も。よんげなる葉ハ取去べし。落るものハ水あげよし

○採て折易き物ハ。火にあぶり。或熱湯にさし入て蓋次

べし。尚至き物杯ハ。採る場所より。其瓶に置して。能おさ

め。漸搖なく頭に。花巾にて包み。氣力を納み心静に

採替精出て後。手をゆるめざるに。冷水へさしさむるを

待てあげべし。撓めどころの次。又火にて花換する物は。急に
く。暫時置べし。火は直るなり。木の類は。打延かけても水
をあげるなり。尚皮目に換し仕方猶多し
○蔓物は。前夕に纏ひかゝみまる茎を。思ふ様にとききえて
ち。茎をつき出しさげ置べし。或前晩に剪くる。縮み。挿瓶杯に
根をと求て。水深くつく様に活置もよし。井戸泉水杯乃水氣
の強き上へさげ置は。弥葉きゝかひてよし
○茎に竅有物は。何にてなりとも。花を先に水を後にさして。蓮河骨の
葉の如き物をいふ也。茎の総に全体を短く剪て。水廣く深き瓶に。
猶長をさしまぜ。水中へ挿入て。花と葉とは茎に多分保物之其外養
ひ方色々有れたり略之（但用薬之外何にてなりとも茎高く浅水にて保様別に有）

○萩は酒につけ後水に移べし。竹の葉は塩水。稗水。又酒
にても。一夜つけ置て後用べし。然ども是にては一時計凌之
害保方別に有之
○葉蘭ぎぼうしゆ芭蕉どんど。或芦。荻蒲菖蒲が。擬宝物一切
の類。葉先延ひ。或養で弱くは。葉形よく目隠さる様に少は影も
結ひ用ても宜し。折養の害にはならぬ次
○室園杯にて瓶水凍つゝ易き所へ。瓶中に硫黄一摘入
置べし。大抵は拒く也之なれども。室の溜貯にもちられ。二概にのみ
ん得難き次（但承鹿の汁を聊加ゆれば不凍とも是は濡る次）
○水凍る節は竹花入は勿論。磁物杯も割け損る者之中に水持
の銅筒を入置じ。竹の節は霜月より二月迄は見合置べし是様用人を

なるハ其事ハ。並ニ水を換て深く仕舞ふし。室くゝ出て
を裂るき物なり

○花を育ふ水ハ日く新ニ遣ひ別て夏秋の頃ハ時ゝ水を取替置へし
水古けれハ茎葉くされ易く花萎ひ早し 但水ハ雨流を第一上とす

○室咲仕様之將の事

○梅ハ冬とても室咲深山ニ出る者ありて花ニとめとも遠去
家国桜ハ其時節の物なるを咲ざれハ花ニ乏し故に自身室を
求て咲せ用へし 但窖の麹室之梅桜辛夷桃連翹杯其外
何ニても十月比末より三月迄の花ハ料拘とも大方室にて咲之
則仕様ハ大抵蕾の顕れ見ゆる枝よき枝を撰置て不用なる
る遅き枝ハ除去り挿るき様ニ拵へ小枝を捨ニ様ニ揉よせ

藁ニて結ひ束ぬへし 少く枝折れ損じても苦しからず 後水の使ふ
ざる様ニ暖なる所へ宛ケ日程も水あげさせて後室の麹の
室へ桶竹筒ニても挿 在適なる水につけ置 二三日歳経ても
日を花の咲まし遅き程の多き室程よく咲也 又麹室なき所ハ
土室穴蔵の内へ風爐ニ火をいけ並べ釜をかけ湯気を室の内へ
籠せてもよし 但火気の出ニ凌まさる様ニ釜と風爐との間を
紙ニて張ふさぎ 湯気斗を出すへし 又大なる箱の外を藁ニても
包みて其内ニ小風爐へ釜を並べ据置ニ湯気を出すへし
其室ニ治を置もよし 但火気の洩れさる様ニ気をつけるへし 何れ
拵見て当時の加減を考ふへし
右出方條様の叢増九之一を出す此外秘事口傳多之略之

〇席上譜傳箇條首尾目録

○柳乃事 附異扱同様の種
○枇杷柏朴の事
○躑躅花のこと
○擬寶珠のこと 附異扱同様の種
○大小萱の事
○山吹捨掛のこと 附変扱同様の種
○芍薬の事 附変扱同様の種
○花菖蒲のこと
○燕子花の事 附変扱同様の種
○櫻三趣のこと
○牡丹三等のこと

以上十五箇條隙首の巻

○菊の事 附異扱同花の種
○紫菀の事 附変扱同様の種
○檜扇のこと 附変扱同様の種
○梅櫞の事
○南天のこと
○蔓草右旋左旋のこと
○萩の事 附変扱同様の種
○芦の事 附変扱同様の種

○蘭乃事 附変扱同様の種
○竹乃事
○女郎花のこと
○川骨のこと
○蓮九品のこと
○紅葉乃こと
○水仙のこと
○艸木水揚のこと
○李自耽帯巻寅のこと

以上十五箇條隙尾の巻

○口傳謡箇条同様
○松竹梅の事
○萬年青の事
○出生見分の事
○大小應分の事
○色艶不言のこと
○三折長短左右定規の事
○加持祈祷の花獻事
○添除順逆的の事

○婚姻真の式飾花の事　○真の飾三具足の事
○釜椽鎚板長短の事　○竹筒墨法十二等の事
○花臺高低寸尺の事　○約板上下寸尺の事
○落板方圓厚薄寸尺の事
以上十五ヶ條口傳譜終
○別に盥鵤此一冊有り爰に不記
右箇條目録の意くは稽古の原落に随ひ熟覧によ
委しく口訣を以て傳ふるもの也

○活花授説問對
○或時予友永来と云へる人来て云く我多年活花を志
して学びむる事を欲すれども鬼角世業にいとまなく唯流
に思ふのみ然ども空しくやまむも本意なくねて此比長
秋社友として籍をの事一両冊をも求めて見侍り唐土の
書なるは偽説のみにして花形是有物は見当らず亦倭集
なれば図も多くあれども流義〳〵の秘する事ありて新変り偽説
も過くありて不審のことなり何れか是何れか非なるや
貴君ニは趣并も其は我輩其事なしむ願くは告玉へかしや
答　唐の事はいざしらず次に此御國の花は師の傳へ無きこと
なれば何ほども摸すべし人の是非を論ずるは亦ひとつ

の是非之を以ハ、こゝろより學ぶ道味にして、他の事を
さらなり。然とも誤て艶容とあらバ我が頑り嗜る所の趣
ハ基に怠して、若人を誤る者也

○和漢ハ俳の無附流行変化の事

○當関に世に活花を翫ぶこと、倭漢流して久しく就中此國
ハ、寧静の余化に随ひ、遂き分別して、流行し家々傳を
ひめして、趣を異にす。故に是一つに入ざれバ容易に知
ることあらざれバ、亦中華の人々珍ら好とる之傳にハ大古
高低疎密備仰斜正式蕃瘦肉対一律乗続等の制禁を
先として牧葡の厭もなし。又ハ一定の体裁なし。とても
有てみて口授秘傳ありの法ハ又々なし。然も教ふ所の物も跡

忠うして、倭漱顛晦の隔あるハいかなる故に偽るや
答　天地に古今の違ひなけれバ萬物ハ盡く生々たり。常
とはまたハ人情自ら変化に随ひ、移り易く事物態形も。時
所の風俗に乗して、夫々の法を備へ、用ひ来りし之。爰をもて
後世に有物有則と説き、佛経にハ随宜説法と示しおふ
となり。亦中古。支那人の瓶花し法悉く渊ル下業頭
に並、獨乗放情を旨として、式臺坐に飾る瓶を列ぬることあつ
てより茭賀の式にかくれ、強く人にもちへざれハ法式をも
謀らず。亦一事の記なく、たゞむべき之倫なく御國の法を
とまし、往古ハ鬼神を齋祈供養の薦となせるものとて法
式あるも、擬りさうらしも、いつしか大の家人の手にふれ五に

しより。術紀要も備はれり。世の変化にさへられ。自ずから
かくれて読ふ人も稀なり。我家のかきをも伝ふるまで
空しく秘めて他にもらすことなし。然れども又花徳殊
なるざるや。終に室町御所にて。賓客接待の設けに書
院花壇の具となしたまひしより。粗其道起り。或ハ古伝を異
し。或ハ流を汲てより。尚御世太平の恩沢に遊び。家
門を分ち。其事次第に開け。婚姻祝賀の式より。朝会相話
の席にまで。貴賤都鄙遠近となく。活花とて。饗宴の
一助となり。流々風俗となりて。用ゆる事広ければ。其法
も拘ならず。終に俗流の陥りとや。爰に秘すれば彼所
に顕し。彼所に秘すれば爰に顕す。其源ハ一なれども

流ハ様々変りて。往昔の法ハ伊勢に澱萩といふの数多く
所につれて名の変ることも。みな目前の常なりけり。想ふ物の
大要ハ書をもて伝ふれども。夫しの術に至てハ。書ハ不尽言。言ハ
不尽意とて。中々筆をもて述ることもあたはず。唯習ふ人の器々
に対して。其意味を告るのみ。是ハ何づくとても変るべし。則
爰をもて伝といふなるべし。其故ハ袁宏道の瓶史にも。不可太
繁。不可痩とぞ。其製禁に。又面にてハ易ゆれども。深く瀬の中
庸なる所ハ。容易にあらはし得ることなし。敢て其道を飾るも
が為にあらず。秘事口伝とせずや。微積して其場に至らば
手づから得し悟るべき。既に聖人の教にも。吾無隠乎爾
と曰へども。其人の器量と。執行の位によるべし。説得たまひ

て。當。民可使由之不可使知之とのたまふ。釈尊も衆生ニへ。極楽十萬億土と説玉ひて。又。太此不遠ともいふ是佛の方便にして。以傳而授以心傳心の旨なり。吾御國の教も神代の昔より。神告神詫ホ有り。皆是神秘口傳にあらざれバ。實と爲難かべきことなり

○花葉折採の辨 附 忠孝発端の事

○問云。或人薬木薬艸ハ勿論雑木雑艸といへども。其善悪實ある花あるハ。別而客に備へ飾を助け。枯茎折木たるに炊爨の用となさゞるハなし。然に近来。活花流行し。民間薬木の差別もなく。悉ク剪取。又ハ薬木毒艸をも厭ハず奇種霊卉を集め。香色を好めて。其益ホ折捨の事ハ。如何なる授の有てや。未だ得ずといへども。先此趣ハいかゞなるや

答 答他ハさもあれ。邦人ぞ一己を慰めんとして。奇木異艸を求め。香色を好めて。或ハ枝捻を折花葉を飾。徒に形容を飾りなして。神佛に捧げ。賓客に對し是を風流となし得我ヶ癖をとてよしとまて。徒に労をして人に誇らんや。倹薬木毒艸の類も同じ扱に。手に得るがら實否を知らず。求めずして。能毒を辨ずに本枝葉も採。風体をなせしより。自ら常盤木とるは草の類。嫩葉蘗生。挿枝折葉に至る。夫しの眺を得らく。古なる里も終に。此ふをあることを覚へ。四时造化の移り變りをも友として

操を観ふれなり。既に聖人も詩を学べバ。草木の名を識と
説玉へり。且れ草木山野に繁茂と云ふとも。雨露の潤育を
得されバ。繁生なる事難く。是も親氣に従といへども。
水の恵ひを離れてよく。繁栄を保ことあさはず。然ハ百穀ハ
草木の父母、水ハ親玉の君様なり。物く好で楽む所より
して。其味ひを忘り難きを見。是を以理を推。義を察し
て。父母の大恩を顧りみ。君上の恵を忘ることを辨へよ。然
時ハ忠孝の導も是より興りむ。斷二樹一不以其時一非孝ニ
と孔子も説せ玉へり。故に樹を剪ち葉を折ることも其
あらバ時とかへし。枝を折事を慎て。鬼神に祭け。祖廟に
うもけて。宗嫉を興しわとひをもなさバ。追善の端と云へし

君親に薦て其意を慰め。老幼に迄へく其目を慰め
バ。忠孝を家の陽となす。枝を伸く茎を操て。邪正の
先の始末を顧て其身を諭バ。教ていふなり。既に備ハまた
其水候の法あり。又此神国なれバ。一年の始を祝し。松と竹
との標を立て。恒常磐の葉を折添て。老も若きも歳
和睦の礼義を勧。然ハ物うして数にあつかるなくて是
て忠孝の道を顧ることあらバ。形として礼義を備く
さるべし。人も亦是を観とも此道を察せざれんハ。禽獣の流に
根を断、菊虎の繁懲に。其夢を実ふの数なれバ。孟子曰教
人以善謂之忠宜なるかな。変をも当流の中祖 希尹国
公、古語を引玉ひて。人心人面の其たるかぬし。旨彩しと

縦文も亦然り枕中一偈小人の常として世業に居
る人ハ利欲に走るのみ。風雅なるハ名聞に奔る。信る
大道小技に拘るゆゑ。或ハ求る所を謬ひ。勧善懲悪の庭
をはなるゝ論ずれハ聖佛の法。國律神の末社に成りて我らが
教ふる者ハ三五の教訓を附属す。ねがはくは学びて
此道を怠らハ捨てゝ其徳なきものぞ小枝として捨るも
易曰善不積不足以成名悪不積不足以滅身 繫經曰
漸漸積功徳皆成佛道とかや。然に小人凡夫ハ小善を
以益なしとして為ずハ殆ど悪を積に近からんと傳へり
実にさることの如く然に於て拘く大小に然し。
憲法の術を得ず準縄の沙汰を道を立る事。

天の物に眠して余ある所之孟子謂教亦多術矣とハ
外ならじ譬へハ聖人の書籍を讀しとても。行ハされねバ
則小人佛の経論を身に負ふとも迷へる時ハ凡夫
なり。能るとても世俗に於て移して名に用されハ。法に
峯の白雲を眺むるに似たり。賢細なるとも道を知て
積ば。大数の「溜霤穿石綆斷幹」といふ漸靡の功有り或
人の歌に「おこたらハ恐はあさましかなてもとんうし」此歩
めよしとそく是ホの道を味へて辨ふべきことなり
大小さまざまの體なく積を閑とするなり
○神佛供養の奂 附 徒和に擬事
○同云 志ハいかなる徳によりて神佛に手向供養の高上

とハなかせ給ふ形容を作り法度を設け曲直伸べこむるに
よせ己を戒しめ身を慎ミ。人を教ゆる以ハ人ハ何迄の示す所をも
答 花を鬼神に捧げ荘厳とし塔廟を備へ供養の方
一とする處ハ佛意にかなて容易にふるとし唯華等よく人
の疾病を愈し。或ハ晴雨を乞ひ苗稼滋茂を祈禱或
ハ畜獣調伏。怨敵退散の呪咀なふに至るまで皆其水を灑
火にかざし偈を誦し。文を唱へ。空に散し地にまけハ。各事
必其効ある。佛説諸経に朗之尚大乗に至てハ。如其もを
指て迦葉に法の大意を悟らしめ。迦にも道を付属し玉ひ
しより末世に達の亀鑑となれり。此法国にハ独り律
の梅を始。三十一文字に擬へ。本末形容を尽し天神の

本末なる美衆の實花を勧めあり。蓋く聖帝の本直を
絶ろ給。尚神社祭祀に用ひ或ハ頭に挿し腰に帯て其実
の徳を祝し。豊饒安全の祈禱の具に加ふ。聖人君子も
艸木の形状葉実の様をかたどらせらく。詩に賦し歌につくりて
勧懲の道を諷諫しまふ。孝経曰「移風易俗莫善於楽」と
説まふ。笙鼓よく心身を養し。舞楽ハ衆目を慰む然と
いへども初學の輩に笙鼓を習ひ奴僕流に笙鼓を鳴さバ何とも
惑して凡俗輩の和を與へ難く猶り驕ふるゆへん也。
琴瑟笙鼓の大小も經に從ひ。其の理を備へ。淫深浅
急の優艶なる音韻に変へ。以其準縄を示ち。君子の行ひを
導ひ物とし。経鼓声律に調和し。人情の感を備ふ。

事をなすにあらざるや。活花も亦小の藝術といへども。時にあたつて都
鄙の雅俗をわかれず。専ら本朝古今の道に従ひ。規格を定め立て
夫々に式を加へ。童蒙児女子の好む處にまかせ。論説へし
其の事を學ぶ者ハ信有。信あれハ總實。實すれハ事を平らかにする所に和し
て。譲ひ事ハ争ふて事を強ふるなし。古語に従縁入者長不
退失となる。譲ハ無礙枝從の田なり。一文に通の堅人なり。
挑実言えずしてらく人をかへり見さしむるの徳に基し。和
せられ。自然に對し篇に負して。膝を折り臂を屈し親を
和げ。賊縁をも絕つ。聊揖譲の端をも興す所なして。
終に風俗移易の傍りをも定めるん。經曰安上治民莫
善於禮と。其禮何の爲ぞ。禮ハ尊卑を分て貴賤を正し。

和して亂さるの法なし。是也。故に擬諸其形容象其物
宜といふ易の道を本つく。艸木の生に随ひ伸縮廣狹大小
に應じて其位に配し。禮法に基し和ぐ。勤め學ばゝ其人
致自己と示し。玉ひて己を處し人に配を云安とそれぞ
枝葉を出生を擬ミ高低を紀し。縮ミハ自ら太きになる。故に
縮まりハたゞゆくとききを延べ。ひがめ添ハ伸ひて直ならず
極へ窮まりハ伸ミ。窮しきハ補ひ。精粗本末の順序を為さんハ
屈信相感而利生焉と。易の教化なる所なるハ。禮譲進退の
趣を屈伸に擬し。若早衰の分ちとも其位に擬へ諭さんハ
序なりやしく其本にいハ。善に進むの塔なるも不導以遠不責
民之所不爲とハ。君子の教へ亦。随其所堪而為説法皆

令歓喜とは佛の道なるに合して能く味へば其益なきに
あらず。此等閑に心得べからず

○非情と以有情と正に無 附 三教五倫所當のこと

○問云艸木ハ非情なるに於て。唯陰陽の事の姿とも實
枝葉。肥瘦盛衰の節あるなし。然るも又一類に來て(つね)ハ
三教五倫の道を勧め。人を勧し情を得ふ理ハいかなる
所に侍るや

答 三教五倫の旨。名と教ハ異れども。理ハ一致にして道
の體用之。其道とはいふ物。天地にみちみちて更にさる所なけ
れバ。亦備へさる物なし。中庸曰道也者不レ可二須臾離一也。可レ
離非レ道也矣といふ。大道なるべし。其大道ハ天道にして虫に

至佛の教ゆる所。萬物普び頼まる法也。故に小枝の
挿木といへども。三つの教を以て。せざるなく行く。五つの典に
あずかる然ずとも云なし。既に孔子説貴下賤無レ不レ得
と説るに。佛ハ度世之道於二一切萬物一而随レ意自在とに
されたり。是万物一致なるが故に。自在也。情又艸木ハ
無心。其無心非情の物は。形をもつて人に次るなり。枝の盡
も萬の。道繕へるも。其侍形なふなり。人ハ更に言なれ
とも。春ハ花を咲に自ら香も寄け。秋ハ落葉を催ひ閉
藏るのみ。陰陽にあらずや。如何なれバ人情。并落に連る
ぞ。されバこそ 釈経に艸木国土悉皆成佛と説れ。又易
にハ 観二其所一レ恒而天地萬物之情可レ見矣と有。孟子とも

物皆備我矣と說けり。然る時ハ萬物一躰なる事明らかけし。則形と五倫に比られハ。縱横長短大小として。君臣父子夫婦長幼の序に喩へ。参差連枝となりて朋友の信に擬ぐ。以て瓶の縁を序次。亦曰方ハ以類聚物ハ以群分吉凶生矣。寔を以集會る物ハ。必貴賤長幼有て以。上下尊卑を分つ。則斜正ハ尊卑の等曲直ハ君子小人善惡の夫論あるの類也。故に心ハ瓶中の主となし。君臣に喩へ。陽を宿とす。陰ハ圓なるハ將に天を則とるの股なり。戴ハ妻臣を以とり陰を表し。花枝を覆ひの甘らく。市ハ方なるをもて。地形に順ふ。相ハ五行を兼帶び陰陽の媒として。中央。三端の盈缺を資ヶ補ふ。元其より

何も中央の冠として。取捨を分かく。一体の盈に及を正し。在前忽焉在後といふ。顔子の言葉にも喩ふ。心の五臓有應るにしたがひ則瓶裏の三枝ハ三才三綱の模範となすなり。必一瓶に臨まハ禮讓恭敬を旨とし。孝悌忠信の道を懇て。なを座さる也。尚神儒釋の道と則る座きて傳る言葉けし。緯ひく白地に塗ば。貴もの幾らくを飾ふ類也。然所謂低に所しく物によるべきれハ。其理に背く。凡俗小人の言なり。古人云ふる有。玉卮無當雖寳非用。又曰依人不依法依法不依人。更是所合。能く味ひて知るべき事也。

○真行草の辨 附 性容隠藏の事

○問云花形に真行草の名有流もあり。或ハ色なくとも

天。而我人の傳ふ。艸木の姿千変万化ありて。其體極まるべ
からず。其極まる所が。造化の妙容にして活きの本體なりと
て枝葉ハ勿論。形あるものと。名ある物ハ他の所にあらず。十文
字形と云へるも。皆出生なれバ。強く表り過ぐる事に
あらず。併し真行草との形を。取極る時ハ。出て折曲たる
事にして。更に人作を加へざる流有り。是がハ始に作や
答 無きと流。有も流。皆一事なり。夫の趣有るべし。
まづ初ハ物の始め。有ハ物の極る所。務て名なくんバ。何をか
其機を紀し。其道の枝折となんや。折名ハ実の賓にして。
形の根なり。別真行草の三體ハ自然の姿。九體と変化せ
る。別て出生を離れて。常に有る物にあらず。必ず皆其名を仮。

曲直を取り。初中後の三體を。総的のこと定め年月日時の
名を分かつが如し。元より此三等ハ了他草花の臍帯の縁
環しざる物ハ。三足に像どる之。象に於て其類の数を云く
器に一類の内にして。又仁載相の名を立て。三枝を備へ設くる
東坡曰真生行行生草真如立行如行草如走是丹の書
法をいふ。変化の趣をうかべし。諸艸木の姿千変万化なれバ。
その形極まへらず。其極まる所が。造化の妙容にして。活きの
本體。十文字にも。出生なれバ強く離れよとて云
や。たとひ出生を痛へ。常して其伎植物にし。我山神図盃とす
所に於て。眺めへきとし。想ひ御りても決して土ハ。性に背と
覚へし。下より。横へ出たる枝とも堅く立て直ぐ堅く立たる枝とも

様らく指し入れし。這場表裏とも考へ候。唯水に育ちて。枯
萎ぜざれバ。出生なりとも所得るかや。夫には分らく。文質野僞
の数ハ。人行も宛ら一縣に嫌くもしき者之。凡物ありて態なく
形有て用無ざるハ。猫にして鼠をとらず。犬にして織
と吼へざるハ。無益の甚也。是様なる獸ハ飼に及ばず也。
古人も戒め置しと也。仰すとも損斗へし。亦自然と生人と
す源ハ活きの體。人法も人事に通る所が。何ぞ用之世に
有て。活きと就に人何まじ出生を悪むべき。然ずるの
本。見るべき形の物ハ。善ぞ用ぬもあらく。悪きものハ難く用ぬも
見らるし候。是十目の視る所十手の指す所にして天眼と云
べし。美と不美悪る不及の境自ら顕れ。取舎の分ち明之

同じや。古語に木実盛則披枝害心。識する哉此言葉。今
目前に樹木高うして梢大なる時ハ。独り其枝を覆す。枝
條秀て長き時ハ。其捺と裂く。艸草強て延れハ。茎自ら
折け。枝葉繁茂なれハ。殆と萎ミ枯るゝ之。甚高低繁疎な
源ハ。各天為に経源而なり。夫されて又理に迯れバ。必然
ア。況其根を断ち瓶上に插はをいてハ。情識乃度量
なくんばまあらし候。是一瓶の姿にある所にて。左右屈伸
上下程重ハ皆自然によること也。大凡天性艸木の容。枝條東
にくずれハ。梢必西に帰り。或南に偃ハ。忽然と北に勢ひ。縦横
斜正高低表裏。左流右顧前俯後仰。並に造化の塾斯
のやし。実を以法ハ自然に則り。形ハ出生に準之。既に天

地の廣大なる。人情の限りあるさまを、詩と奇すれバ僅に六義と六躰に限れたり。未だ限りあることを聞かず。万物をいはゞ艸木の形に比ぶれバ、手てら六義や六躰に至るべきぞ。是皆其方角を設る大綱なり。師曠之聰も、不以六律、不能正五音と孟子の聲一にありても、其理を明むべし

○曲直凝涎の弁 附 稽古心得の事

○問云 人の手ハ志りやすき物にて、直きをかまへれバ直く曲るを取れバ曲るものなり。必凝涎むかしよりいひ、癖つく者なり。故に活躰にあらず。枝葉も生る直なるまゝにて、すべて縦にまがるを伸す。伸ひざるハ塵あがるがよろしへきか。竹なれど蓮根の直なる物ハ、皆豊にまかせ行けれや

答 いかにも人情ハ偏りやすき物にて。朱に交れハあかくなり。善悪友によるべし。人の心の邪正ハ行ひに顕われ。氣の強弱ハ形に生つ。思ひハ内にあれども外にあらはるゝと。古き言葉にも見へ候。然ハ一時一興の意をとりいへとも又恥辱のことも去なから躰中の形に連て。人情の偏より癖つくと形るぞ。手けづり夫造る郷の。人に偏りて行に出バ。唯ら手を割る所。夫是深くてならぬ事也。さらに不知らく彼にあら、次ぐ唯其の強弱によるなり。亦其形も大小厚薄曲直多女ともに。是に其一をとる之。曲れるハ分論直成るも偏りに真直ならバ。外の枝添ひぬれバ亦曲直るとも怕し。実に。水至清即無魚、人至察則無徒、枉而直

之らん。至人の旨ありて。一事万物の則あり。直ならんと
其理有事を察て。今既に都鄙。活世を殺ふ人多
けれども。独間孤寂の友とし。楽者まで形く。唯人々迎へ。
見きんことを尊ぶる流多く。其所にして遊ぶならぬ人く
の。猥りにめでをいふべく人隠居同として。いよく其言葉を
元来とし。眼外変態なる其備を事とし。殆本意を
失ふ者鮮からず。是等の人々の心ハ。曲直の道不に
あらば。太他に関むことのみを索る。俗情の意しきに
より興ぜず。其名聞も。其形をさげむの一方なれ
ども。精く其跡を顧ざれバ。僻に流れて。実意を忘
者之。大小等事を殺し。理を無べきれなり。其道の奴と知りて。

人の笑ひを見ずしてあり。能く考へ玉ふべし。彼草木の
曲直ハ造化の自然。竹の直形なるも竹の質なるとあるが故
梅の曲まるも梅の態にハあるが故。其外山野渓池の。開
木数草と云へども。皆時々節々其地に随ひ。出生を見に
直を後くとし。活に無じてなし。人に夫々の姿ありて却て直
も不深なるべし。精まりくそびられるべきなり。蓮の直なるを見
せし人ハ。君子にして。茎より。精く直なる葉を貌しくなりまさ
小人ならんれバ。老子も曲則直。枉則全と説玉ひつる。
曲直ハ陰陽始末。其のよく居して物を形り。伸まし。能く載る
所以と知。考へ玉へし

○瓶中種木隠作の辨 附長短詩歌の事

○問　立花ハ一瓶に幾種も挿事に限るべきや。瓶史瓶花譜
等の唐書に傳ふるハ二種三種に過ざるなし。或ハ一草にて一色
淋二本なれバ麻薬を以傳定ゐるも有り。或ハ独り秋花
ハ論を俟ざれバ花にハ数の趣ありても挿べし。何種にても
唯縦ほしく入て宜侍や
答　いかにも二種三種に過ざる事也。大要夫等に趣き
候得共に遠ハさる為し。吉なりても其性状の全を移さんと
せバ只一種に如くべからず。上下陰陽左右屈伸に隨ひ。花
葉相對して生立自ら叶ふべからず。又二種三種としても麻
縁葉枝なと束縛すること悪し。亦一根をもて一瓶を插べし。
何れも二三枝合して其件をなすべし。或情なくて下
掛しき物。或ハ花有て葉なき物などハ。別種をもてつぐ。補ふ
べし。但瓶中に用ゆる数ハ大旨屈曲なして太き物ハ二根
三根ならして少なるべし。或ハ五枝ならして細く柔従なるハ五本
七本も。精微少の甚しき物ハ。形備く漸止むべし。猶
又立花大中補物に至りてハ。席と器とに隨ひ。花譜を鑑
其形状を進み三種も五種も時宜に任すべし。花は諸の上
に有べし。猶又瓶花譜に獨秋花ハ論なしとて。秋の趣み
も是なりとや。夫ハ其國其人の心に任すべし。さればこそ
に秋の野に千種咲交ゆるを。席上に移して賞翫す
對するに。争う様もなきなり。今秋花を得り論をも
ここにも一種ものもて活れ。且作りなさるも。云ふても あらされバ移に

夫々の説を捨ずなる事し。今当流に傳ふ所ハ。先是ハ芝
に桔梗あしきと云。或ハ萩にやんたる女郎花。赤ハかるかや
小車の裏を初めとし。言葉にして出所相違有ハ。二種
三種なく五種ありも。形状繁雑なりしさし。猶に擬ひ夫く
の趣を穿つなかれ。刈瓶花の本意ならず。都て篠薄を
として本となさん。彼唐詩の教行。我國の万葉集の長哥
の如き。天地山川四時人情ひとつとして述さる所なく。一
句一字も儀に叶ざるハなけれども。甚本繁長にして
意味深く。一言に寓しるものハ。都句絶身には。五七言
の絶句。三十一文字なり。味ひ唐詩に似たり。甚道性能
此人なり。しかれども又はかりいはば浅學末学の上に

をいくく及はさるともて。云まてるに此くふるん。第もて道の
仇にして必も神の意にに也角事

○同流異称の辯 附本末傳説の事

○同此世に流布する活花ハ。多分茶家の餘流なるハ恐
にも形ハ句編法式にもやうき甚茶道に拘りけれバ。各に
も末をも汲者。終にとして本末虚実を争ひ。甚しきへ
奇怪遺恨を挟む説も有。是にハ如何に傳るや
茶香他ハ当ら流。古根らし同流同流と云へり。末くに至てハ
各水上遠けれバ。幽名無實なるも有。或ハ始祖の傳へを
失ひ。漫に私説を設け。古傳と名つくる故。甚名一ならす
種実なるも有。或ハ形状実なるもの式法拘し紀も有。

也其名を續者。流末とハいふべし。實ハ其時く先達の
高弟雅俗。功者不功者共に。各々の手癖有て我が立し
易き姿のごとし。常として人に傳ふる故。漸に本を移変して
一家せざるべし。何事も時勢の癖に流れて。其本を
失ひ。後ハ変錯ひたる者。無論止まることなし。何ぞ甲乙
を有べし。然共。勝劣をいふことハ。人を紀すれバ。仇を結ぶの端なり。
敢て他の未熟を我が不細工ハなる倒し。我が解なき
我が徳。人尊ばれバ。猥に濟ることなかれ。己が親しき流
事探ハ尚以也。唯手前くに道矣の薄手揚に心掛。師祖
先達く流名を穢さる様。今都鄙の比技を観て事の
至淺なる所なり。先達ハるとの数多出来て中ハ活

業の為にし。或ハ名聞を求めるとして。初心未熟の
勵なく。秘事を授け口傳を棄て。術相をむさぼる
となりぬ。其傳授の書籍ハ多けれども。今の拙き人ハ
よりて先達ハ。師と称せられての法語なく。学者ハ價を以
秘事を買ひなどして心得。假にも其子どもに至ふの道を
失ひ。其所よりして。遂に一傳を得れバ。萬民に通達
しきるなど。経過が悔しくも人にふれ得り。誰にか傳へ。
己が丈夫が先生と称せられんことを欲し。志に従を集て。
名聞を専に自病を事として。或ハ利欲にあきりてハ人を
憚ることなし。望く其事を求し得られハとて。一旦の
虚名にして。却る其道の實意を失ひ。恥をひ擬せる

者也。抑師ハ。己が紀にして人を教ゆるに。道を以てする称号
なり。戯にも先達師と呼ぶ。字義に二ッなけれバ。道を尽し
を恥ぢ隠しむべき事也。凡大小高下となく修芸ハ
技の常として。秘事に伝と云事有。其者の器に随
ひ。技術の位に応じ授る事なるべし。然なるを初心
未熟の族なし。口授秘伝など是を先に無く人を迷はする
者有。大方ハ我が芸の未熟なる所より教る業淡く先
達の器にあらざるを人知り。用ひなしと恐れ。或ハ
同事なる人にも秘きくと目の縛り。授ざる事をなさじ
亦ハ利欲に媚び諂ひ其人をとり其人を損ね止んと
為にする者ぞや。夫ホの先達ハ必初心未熟のことを

謡謙不実を勧め。児輩童蒙を誑惑し異事悪事を導く
べし。歎かはしき次第也。抑活花の訳ひから風流の一事なれバ。
必俗を去る一ッ。花瓶器物にも。淡泊あるをよしとするべし。況
尚茶室の花ハ古人より。連綿として其趣有り。夫くの門
に入りて学ぶべし。今書院生花の花にてハ。唯其流の
名のみ伝る者ぞや。其趣意ハ其源をよく問べし

○寶物常盤葉を用ゆる并附禁青の事

○何に或流の伝ふ。花数く賓となる物と。花なき常
盤葉の類ハ。活花の貴賤なしとて用ひバ。亦用ゆる花者ハ。
必花器を交ゆ。別に剪り様枝を除く物ハ。嫌ひ用ひざ
るなり。是ホハめ何にたるや

いとんやうにて月ともいふの々。月ありて見る物ハ皆ハ家を
立さしても。月の形ハ画けるもなくとも思へることとてそいふべき
すくう枝りしかれど。もちゐしハ直なるてこそ。唯賓客飯講の
折にこそ。求て古きまる器を入ぞ。主の心をハ深くりして。饗應
を設け儀とて似たり。是に乃節にこそハ又格別の心得を直し

○稽古虚實の異 附 殺活得失の事

○問 古式入活花ハ立花と違ひ擲入にて手軽き事一ちあり
と別に習ひも是なく。唯時々の木草の風情に随ひ面白く
の気象に任せ入へし。自然に面白き姿出来る者なり。今ハ
昔と違ひ。古の形ちに成り。花瓶留物にて悉く作事なるゆへ。
必器物をも害なる者。されハ唐の活花にハ。瓶内物を設け活

時と見へたり。各其事の強者。自己の作意を交へ。臆説
を構へ。枝葉を折曲げ種々に責めなやまし。無益に隙を費し
花て常に無理押かくし。徒に折撓て損るのみ。斯てハ活花とハ
いふべからず。殺花とぞ言べし。唯花ハ一時の興。心を労さず目を慰
め。情を養ふの外他なし。古人の陶淵明周茂叔の人々に於てハ。適
情を活かしめて自然の姿を殺さず。是又何の為や。是ぞ古実を
愛せし者なり。今も尚是れの趣を則と知る人もあれ。さ
るこそ由緒ありや

答 いふても近来の古ハ流行に長し。未々の教ひなれバ。自ら先
達せる者を。無幸なる様多く出来て。事の義理をも紀さず。
物の深理をも知らず。偏曲実体を専らにし。人を欺く。

修年若き人く婦女子数ハ。師と寄して経述が体しくまハ
ひたち貴て。其者の行遊好悪をも察を波。左子耗され流ほ
誘引れて。を門に入さまハそ師の我勝鹿言を。實と心得。怨ち
其口吉かなれて。人を轄し他を譏り。まてハ親しき人をも批に
論ふ事さへちあらぬ。総して忌む事業の常として。己か入すれ
間ゆまさるる事ハ。理非善悪の分ちとなく。我か流の外ハ一概に
悪しと心得る者有りハ。諺に九疋の嵜猿が。一疋の真猿の我に似さ
るとぞ。却る方かるハなりとして。笑ふとさの類なり。是一犬虚を
吠れど。千犬實と叫ゆるとのか。まさく初心未熟なる事しと
先学ハ得学の手引なり。初ひ学びの事ハ其善離を無怪
親外家第なる様をも。是とゆ得失が上に尚悪き所ハ。只覚

易く。甚覚へする修みもそ人の余程後え。何事も先入か師とさハ
れど。左ホ宋ゐ心得何して。其道との實意をも学ふべし。一旦我
字徹しさる事ハ。総拠り空の功有也。譬へハいろはの文字
を習ひ覚へまする人なる。其假名字を以て通用されハ夫丈の
用調へり。然と名聞のことを学むし。未熟せさる言名字をん
調へむとさバ。其用無かる事易く次。何事も其場に至りては
して其下をなさまるまハ。労して功なき所なり。果ハ根と届
く揺る而もなし。却る其道を識る者へ。本子先ホとなりん。
我が力さけ子学る所か肝要なり。家をひらさそれ為るべきハ。
家傍諺者の癖。政もべきハ過失。兼るかし終ハ忠孝の道と
職業。恐るべきハ天命と公家の掟。学べきハ聖人の道。其教を

淺けれハ智も亦精しからず。智くハしからざれバ業の義理疎く。毫厘の違ひより千里の過ちを生ずるなれバ。寳子師ハ無
物總べる針のごとし。皆子ハ纔かなる事のみなりとも。瑣細なる
事も學びてとらざるなり。能く其先達を擇むべきなり。先賢の戒
あり。儲文語ハ擲入るとハ手段に拜するハ能くして。言葉
に向く所の者へ命を教も高く。又規矩準縄も能く。自己の思
ひ入れば又蕭捨て忽ち瓶に移すを。而作と思へる者ハ象功
者にあるや夫ぞハ唯家勝枝縦と云ふ者にて全く象功
者の語にハあらず。むたりとも論ずべきなれども。空上の飾
なて賓客招請の設けハ。諫男不敬と云ふなり。斯て下ハ諸
花と云ふ名而已にて。たゞ睡眠を覚すのみ。或ハ此業を厭へる

の外何の益なき戯といふあり。前にいふ如く物有れハ用有
用有れハ必功あり。徒にめを見捨んもむべなし。君子釣
而不綱弋不射宿と。何ぞとあれども殺生ハ避けてあれども
少しても悪を退け善に進むことをなくにいふなるべし
物事なして労なきことあらざれバ。勤むることに労を厭ふ者
を稀也。然ハ聊にても労ある事あらバ。益あるべきよりなれ
ども。難儀にても理の宜き人に非ず。必ず廉恥を以て定めるに
縁り。性ハ道によりて賢しこく。秘事ハ睫とそ。家に滯る
道すなハ人を諭し。家の才を顧る者也。古へ唐の輪扁か
車を作る味ひをいひ。齊の桓公が天下を治る聖経を論し其
意を述。是等の事を推して余が思し。世に箸を握て拘泥

術なく人ハ日用の執行にして生涯怠るまじき術なれハ得
手に未熟ハなさけなき事なり。然るに手なれざる輩ハ又愚俗にハ
取得難きものとおもふべし　古語に良工者使手習知其器而器
亦習知其手といひ宜なる哉。賢なる上智の人といへども。稽古
なれざる事ハ容易ハ出来がたき道なるや夫より下ざまに
至るハ猶更なるべし　既に斯る事学ぶといへども好まれハ得る事
あるを況や好くといふべき学びされバあまた知ることなし　得る
も全くなく其甲斐あらハいと為を惜むべき次第にて悲し
季節ハ得るも急がず慶し　万の事功者になれなれハ緩急
遅速ハ心のままなり。然其上手と厭ふ人ハ有体ならぬなり。
或ハ性質の強弱により。或ハ其事に係り。好嫌勉怠の

違ひて上手と下手とある事。背を合て東西に行ごとし　故に斯
の技は得ざるを以て得たるとする迷ひ。眼能百里の外を察れども
我が眉毛の厚薄を見る事あたはざるが如く　遠近ハ行て後始めて
其境をふむが如く其事を極るハ過也何程気象我慢を先達
と取るとも。彼個曲なる枝葉を書説の大床に器相離れて見ゆ。数條
を束ね家枝を集む。夫々の風韻を失ひて。盛り積むまじく為でう
なさん適小瓶に立る枝の縦横或ハ左別にあり　二本や三本挿得る
事有るも。夫本ハ時の偶中にて定規にハならじ。又近来も瓶中
に酌酒の具を用ることあり。此枝寄る所より折くハ立る花は[illegible]開れ
ハ後来に交形も増し自然と式法も備ハり此道全く整ふといふ　語曰
欲善其事必先利其器といへり則是本の義なり　[illegible]羽翼

の未調さる時を於て本意とを念。又花配用るにつき器物を損ず傷ことを有べきとや。夫才の義ハ花配もこれも能きそ。其器子而らさる傷人々甚物を害ふこと目前の定理也。爰を以徹少のことも傷さはしめ玉ふハ卒尓に得難き事をあらし其義理を味さるハ堅くハ父母の好玉ふを喜て害ある物を薦る類ひなるに実意薄く唯上むき斗を覚て深く嫌さる事ハ皆預抽めしく家が入用の節に。自在に出来さる者也。行とどこ切瑳琢磨の上にハ小理を以大悪を止る故ニて有身養意の一助ともなるなれ。知之者不如好之者。好之者不如樂之者と君子の教。擇其善者勤而行之とハ佛の示言也。小大世教に渉る事なし。されど此意に志なくハ凡人の若楽歟ぞ又有バ。一枝を取るハ必己を顧て。樹木艸茎の曲折を。

我らが意に比べ。自恣放志の僻を削れ。剛枝風に割れ。弱柳雪を凌も。各身体の上に推察し。彼に機ハ是にあらず。能堪忍ひて揉直さハ。自ら習ひ性となるに近からん。木受縄則直人受諫則聖也と。彼南山の竹ハ其の儘に直なれど。亦夫ら上にも括而羽之鏃而礪之其入事深しと。孔子仲由に説示し玉ふを以察へし。挿花暫時の教といへども学べきに故有ハ厭へからず。論るに餘りあらバ倦ことを勿れ。然ハ致知格物の初めしく終にハ克己の端をも興さん。物々察一物而貫乎多と聖人の教なりしか。欲能情を教て。有情を示ハ三教の旨。方便の教生ハ菩薩の濟度。一教多生ハ佛の慈悲ハ羊を殺して禮を愛玉ふハ。君子の行則仁の導にして。各權の譜楷也。彼淵明。茂叔の人ならずハ専花に

操をわしく。天然の趣を楽しむ。故に庭艸蔓これを。雛次刈ゞ次
とりや。是ゆハ勢烈なる隠君子ならバ野鄙なきの麁を愛て
其身を改めむ。真ニ其趣を慕ハゞ。志と行を学ぶべきこそ也唯
恐らくハ耳ニ聞くば口に言而已なれんか。世ニ似く紕ある物有。紕の苗
ニ似く。駑馬の中ニも形ち断斗なる驥騏ニおうへるも有。其断と
形の相似たるを以。驥と並び立て千里ならむと行を勉んとせバ。必彼が
奴となりて生涯其身を困しめ。永く鞭策にを責を受んもなりん。
又駑馬ハ駑馬の群ニ居て。雛の任を貪る事なく鷃ハ羽翼の限
有なり。蓬蒿の間を天地として。其易きに遊ハ。将ニ鵬鳥の
楽ミニ均しかるべし。里俗の諺ニ。鵜の真似する烏ハ水
を呑と。我わすれで己をを歎き。寸を以尺ニ飾る。我が輩の邦俗ニ

くゞ滴手より。蟹の甲に似せて穴を掘り。以管窺天粿説
ふよらし。便短者不可以汲深とハ君子の金言也。されバ以ヘ
理も亦居れバ兆ニ迫し。聖人の教も至れバ可もなく不可
もなく。歌道の道も一字不識ニ叫るおして況や至ニ乃技
とや。されバ天地ハ測りなしれバ。変化極りなく。人工
及なきこと知るべし。損益得失ハ首尾ありて。四時の環
くが如く。唯苦楽冥明ハ名甚露ニ應ずる者也

古歌ニ

こゝ縁とやこゝろみちハなし　神無月

松きちくれ子ねまきぬとも秋がた

○活花通用文字之事

○生活挿名者義ハ渝れとも皆相通ていけの字に用ゆる挿の字。義理通られとも生活の字を。俗用せらるゝこと久し故に不文の者も覚へよき易し

○花瓶花押へ。古所りの名ハ。瓶の字を用ゆ爾しも是より風挿と云ち。娘へるとも義也亦笛押への字も用ゆことも有り

○花を祭上の瓶に插ふを入るると云て。入まるハ納なり亦たを前後へ枝葉を扱ひ所ると。遣と云なり 遣ハ随へ送るの義なり

○別種ハ勿論同種にても交ゆるを。添物と云也 添ゆるハ益の義也。亦下種待ひ根鎮共云なり

君據說問對ハ 中和の旨を受て経傳を則とり鄙言を厭ハず瓶花の意を述め何そ斯道に知手たることを得んや損しくも言ふならや於ては今んさされを知れる者しくの児玉ちんことを冀ふ寺原より人名志さしあれハ乗てふ他の綫引を繕表ちりる眉ふと子に蔽つりれ浅淵を渡るを言ふ請の学し得深ゆる人有て千萬ゟ一も栞とふ作てあるて先師の本懐 亦々 幸ひ也事に過さる者あるしと云爾

説

夫婦之道哉因縁不可子
定之子也爲之攸實者其可也
若内之主要而縁不思議至徑
之所耳掃意之切枝後悉能包
兩様之心賢可掃之離中以
是者服因可着之心志於毛乎

恨能實之所我世也恃情
安靜可争得之時有波之様
并哉皆實一日月行之年至
教相先生論心此枝久之當
業法於因大事之起之以規
疑我之因繫安可以實者以離
之外又此内之其以使福以實者之

青山御流活花手引種

桂月園泰雅著

畫工　百川子興

彫工　野代柳湖

京都市三條通御幸町角

吉野屋　大谷仁兵衛